
16 世紀の印刷ビラ・小冊子の話しことば性¹⁾

テキストの種類と意図との関連において

芹澤 円

1. はじめに

15 世紀には、文字で書かれたテキストを読むに際して、「自分の目で読むこと、他人の朗読を聴くこと、それに書物を眺めること」(エンゲルジング 1985: 49)の三つの方法があった。すなわち自分自身で読むとは限らなかったわけである。大量印刷の技術が飛躍的に発展した 16 世紀になってもなお、ドイツの識字率は都市部でも 5% 程度しかなかったという (Schön 1987: 36 を参照)。この識字率を踏まえると容易に想像がつくように、16 世紀の宗教改革の時代に流布した「印刷ビラ (Flugblatt)」と「小冊子 (Flugschrift)」²⁾ という文字テキストは、文字の読める者によって文字の読めない者に読み聞かせが行われていた。³⁾ 音声を用いて読み聞かせが行われた印刷ビラと小冊子には、文の短さや呼びかけ語の多用など、話しことば性(口語性)が高いと思われる要素が見られるという指摘がなされている。例えば Meuche (1976) は、印刷ビラのことばに「短さと具体性」(Meuche 1976: 8-9) という特徴づけを行っており、Schwitalla (1999) は、小冊子において「感嘆表現、呼びかけ、疑問文 [...] のような話しことば的な手法がたびたび使用された」(Schwitalla 1999: 36) と述べている。⁴⁾

1) 本論文は、2011 年 10 月 15 日に金沢大学で行われた日本独文学会秋季発表会で筆者がおこなった口頭発表「過去の文字テキストの口語性はどのようにして測定可能か?—16 世紀のドイツ語に基づいた方法論的考察」に基づき、加筆修正を加えたものである。

2) 宗教改革期における印刷ビラ、小冊子についての概観については、芹澤 (2011: 3-4) を参照。

3) 宗教改革時代の小冊子が、個人で黙読され、個々にもしくはグループで読み聞かせが行われ、また、書き写しがなされていたことを、Schwitalla (1999) が指摘している (Schwitalla 1999: 27 を参照)。宗教改革期を含む 1450 年から 1550 年の間の小冊子の定義については、Schwitalla (1983: 14) を参照。

4) Schwitalla によれば、宗教改革時代の小冊子は話しことば性を容易に想起させるメディアである (Schwitalla 2000: 674 を参照)。

しかし、音声を用いた読み聞かせが行われていたからといって、どの印刷ビラ、ないし小冊子も話しことば性の要素をほんとうに十分に有していたのであろうか。宗教的内容か報道的内容かといったテキストの種類や作成意図の違いに応じて、話しことば性の高さに相違はなかったのだろうか。本論文は、16世紀に出された宗教的内容の印刷ビラ1点、報道的内容の印刷ビラ1点、そして宗教的内容の小冊子1点をデータとして、⁵⁾ この3点の文字テキストがどの程度話しことば的であったのかを測定し数値化した上で、各テキストの話しことば性を比較しようとするものである。現代の話しことばに関しては、音声データを用いた分析が可能であるのに対し、音声データが入手できない歴史的段階の言語に関しては、文字データをもとに話しことばを分析するほかなく、分析は容易ではない(高田・椎名・小野寺 2011: 12-13を参照)。⁶⁾ 従って、歴史的段階の文字テキストから話しことば性を測定する際の方法論的問題についても考察を行いたいと思う。⁷⁾

2. 話しことば性と書きことば性

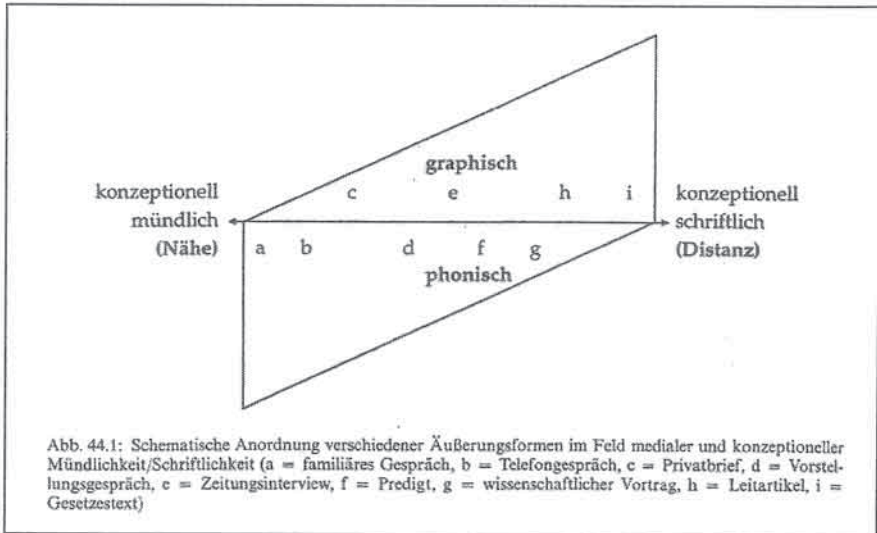
2.1. ことばの「近さ」と「遠さ」

家族と話すときのことばと学術論文のことばとを比較したとき、その言語に話しことばと書きことばの区別があることは明らかであろう。この自明に思われる区別に関して、Koch/Oesterreicher は1985年にひとつの画期的なモデルを提案した(高田 2007: 69-70、渡辺 2009: 7を参照)。このモデルにおいては、「話されることばと書かれることばは、もはや単純な二分法で分類されていない」(高田・椎名・小野寺 2011: 13)。文字で書かれたことばよりも、話されたことばの方が話しことば性が常に高いわけではないのである。Koch/Oesterreicher が1994年に一部修正を施した図表をもとに、このモデルを説明してみよう。

5) 各テキストについて詳しくは、後述の3.2および巻末の「使用テキスト」を参照のこと。

6) このようなデータ上の制約にもかかわらず、歴史的段階の言語を対象とした語用論的分析が、「歴史語用論」(Historical Pragmatics)という新しい研究分野により10数年ほど前から精力的に行われてきている(高田・椎名・小野寺 2011: 6-9を参照)。

7) 本論文は、「当時の社会文化的文脈と関連づけ」(高田・椎名・小野寺 2011: 21)という点において、歴史語用論のうちでも「語用論的フィロロジー」(Pragmaphilology)と呼ばれるアプローチに属する研究とすることができる。



Koch/Oesterreicher (1994: 588) より

Koch/Oesterreicher は2つの次元を峻別した。すなわち、物理的な「メディア」(音声か文字か)という観点で話しことば/書きことばであることと、ひとが頭に抱く「コンセプト」という観点で話しことば/書きことばであることを明確に区別した。したがって、このモデルでは、縦軸と横軸の区別が重要となる。縦軸では「メディア」が何であるかが問われており、下側のフィールドが「音声メディア (phonisch)」、上側のフィールドが「文字メディア (graphisch)」となっている。横軸では「コンセプト」が問われ、左の極に「コンセプトとして話しことば的(近さ) (konzeptionell mündlich [Nähe])」が、そして右の極に「コンセプトとして書きことば的(遠さ) (konzeptionell schriftlich [Distanz])」が設定されている。⁸⁾ 左方向に位置づけられるほど、コンセプトとしての話しことば性が高くなる。ここで言う「近さ」と「遠さ」という用語は、とりわけ話し手と聞き手の間の心理的・コミュニケーション的な距離(親疎関係)を表している(渡辺 2009: 8を参照)。

以上のことを踏まえて、具体的にこの表の c と g に着目してみると、c は「個人的な手紙(Privatbrief)」を示しており、図表の上側すなわち文字メディアのフィールドに属している。一方 g は、「学術的な講演(wissenschaftlicher Vortrag)」の位

8) Koch/Oesterreicher (1985) の図表では、前者は「近いことば」(Sprache der Nähe)、後者は「遠いことば」(Sprache der Distanz) と呼ばれている。

置を示し、下側すなわち音声メディアのフィールドに属している。このcの「個人的な手紙」は、文字で書かれたことばであるにも関わらず、図表においてはgの「学術的な講演」よりも左側に位置づけられている。つまりこのことは、文字で書かれたことばが、音声で話されたことばよりも話しことば性が高いことを示している。心理的・コミュニケーション的な距離という観点から見直すと、cの「個人的な手紙」は親密な間柄同士のやりとりであり、心理的に近い距離にあるため、「近い」ことば、つまり話しことば性が高くなっていると言える。

このKoch/Oesterreicherのモデルによって、文字テキストを話しことばに関する分析のデータとして扱うことが正当化された(高田・椎名・小野寺 2011: 15を参照)。すなわち、文字テキストでしか伝承されていない歴史的段階の言語の話しことば性を、相対的に位置づけることが可能になった。

2.2. 話しことば性の測定法

Ágel/Hennig (2006)は、このKoch/Oesterreicherのモデルに依拠して、話しことば性を測定する具体的な方法を提案した。Ágel/Hennigは、話しことば性を「近いことば性(Nähesprachlichkeit)」という名称で呼んでいる。Ágel/Hennigは、当該のテキストに確認できる近いことば性の高い要素を一つずつ数え上げていくことで、各テキストの近いことば性が算出できるとした。そして最終的に得られた値を、左端に置かれた「近さのポール(Nähepol)」と右端に置かれた「遠さのポール(Distanzpol)」との間の座標軸上に相対的に位置づけ、テキスト同士の数値の比較を行う。これに関してÁgel/Hennigは次のように述べている：

パーセンテージの算出によって数学的な精密性を示唆することがわれわれの研究の意図でないことを、ここで明言しておきたいと思う。われわれが重要だと考えるのは、次の点である。すなわち、ひとつには、ある種類の談話もしくは(コーパス)テキストを近さのポールと遠さのポールの間どこに位置づけるかについて単に純粋に思弁的ではない方法を可能にすること、もうひとつには、このようにすることで[...] われわれのコーパステキスト同士を比較することを保証することである。(Ágel/Hennig 2006: 35)

Koch/Oesterreicher のモデルでは、先ほどの c「個人的な手紙」と g「学術的な講演」では、確かに cの方が話しことば性がおおよそ高いことを示すことはできる。しかし実際に cと gとがどの程度話しことば性に差があるのかという点について数値化して示すことはできなかった。この点を考慮して、パーセントにより数値的に示すことができるようにしたものが Ágel/Hennig のモデルであると言える。

3. 「近いことば性」の分析

3.1. 近いことば性の高い要素

Ágel/Hennig は、近いことば性を分析する際に二つのレベルからのアプローチが必要であると説いている。一つは語や語句に関するマイクロレベル(Mikroebene)での分析であり、もう一つは文全体を包括的に俯瞰するマクロレベル(Makroebene)⁹⁾での分析である。Ágel/Hennig は、テキストを特徴づけるような「文形成上のパターン(Schema)」(Ágel/Hennig 2006: 34)をマクロレベルで見通すことで、テキストの近いことば性がより正確に把握できると考えた(Ágel/Hennig 2006: 34を参照)。

Ágel/Hennig はその著書の最後において、「近いことば性の高さ」に関わる要素を76種類、リストアップしている。そのいくつかを紹介しておこう。¹⁰⁾例えば、このモデルにおける近いことばと遠いことばを区別する規準の一つに、「統合的(integrativ)」であるのか、それとも「非統合的(aggregativ)」であるのかという点がある。マイクロレベルの観点から言えば、統合的な *woran* という疑問詞が使用できるところで「非統合的な疑問詞」*an was* を使用している場合は、この *an was* は近いことば性のある要素と判定される(Ágel/Hennig 2006: 388を参照)。また、*dißer boeßer Gesell* という形容詞の語尾変化のように、(本来ならば *boeße* であるところ)先行する指示代名詞の語形変化に引きずられて余分な *r* が形容詞語尾に追加されている場合は、「非統合的な名詞群の格変化」とみなされ、近いことば性があると判定される(Ágel/Hennig 2006: 388を参照)。さらに、マクロレベルの観

9) このあとの3.4を参照

10) 紙面の都合から、ここではいくつかを例に挙げるだけにとどめる。

点から言えば、例えば「自由テーマ (freies Thema)」¹¹⁾ や、「付け足し (Nachtrag)」¹²⁾、「枠外配置 (Ausklammerung)」といったものは、文の周縁に非統合的に位置することから、近いことば性があるとされる。¹³⁾ この他にも「心態表示 (Abtönung)」や「情緒の表出 (Emotionsausdruck)」、さらに「語用論的省略 (pragmatische Ellipse)」¹⁴⁾ なども、近いことば性が高い要素と見なされる。

このように近いことば性が高いと思われる要素を分析テキスト内に見つける毎に、1 ポイントとしてカウントする。そしてカウントされたそのような要素の総数を、最終的にテキストの総単語数で割る。そこから近いことば性の値を導きだしていく。

3.2. 分析対象とするテキスト

本論文中、話しことば性を測定する対象とするテキストは、次の三つである。まず一つ目は、1550 年頃に「マルティン・ルター氏の真の肖像画 (Ware Contrafactur Herrn Martin Luthers⁴⁾)」というタイトルで流布した宗教的な印刷ビラである。¹⁵⁾ 総語数は 451 語であり、マルティン・ルターに関して書かれたものである。二つ目は 1556 年に流布した「エルザスのオーバーハウゼン居住のアダム・シュテークマンの殺人行為 (Die Mordtat des Adam Stegmann zu Obernehen in Elsaß⁴⁾)」という報道

11) 自由テーマの例として挙げられているのは、*Hermann und Karl für die macht es eine grose last*. における *Hermann und Karl* である (Ágel/Hennig 2006: 391)。つまりこれは、「文の左端にある、文外部の文周縁構造 (Satzrandstruktur) であり、統語的に後続文を投影する構造の構成要素ではないが、語用論的な投影を引き起こし、[聞き手による] 受容を制御する」 (Ágel/Hennig 2006: 391) ものと定義されている。

12) 付け足しの例としては、*in der Underpfaltz sunsten wonhafft wahr zur Neystatt bey der großen Linden* における *zur Neystatt bey der großen Linden* である (Ágel/Hennig 2006: 394)。つまりこれは、「右側の文周縁部にある非統合的な構造であり、先行文の投影構造の構成要素ではなくて、むしろ、既に実現された投影構造の要素が、付け足しによって精密化される」と定義されている (Ágel/Hennig 2006: 39 を参照)。

13) Ágel/Hennig は、文の周縁にある構造 (Satzrandstruktur) を原則的に非統合的としている (Ágel/Hennig 2006: 53) を参照。

14) 語用論的省略とは、「アピール機能を有さない、状況に拘束された短縮形であり、[...] 例えば友人の新しい家を見た際の、*Schönes Haus!* という発言」 (Ágel/Hennig 2006: 395) である。ここでは、*Das ist* のような主語と述語が省略されたと考えることができる。

15) この 3 つのテキストの典拠については、本論文の巻末を参照。Schilling (1990) によれば、当時の印刷ビラの 80% 以上の作者が未だ不明なままである (Schilling 1990: 13 を参照)。小冊子の作者に関しては、小野 (2006a: 145) を参照。

的な印刷ビラである。¹⁶⁾ 総語数は777語である。これは、実在の人物アダム・シュテークマンが実の子供3人を殺害した内容を扱っている。そして三つ目は、「第2の盟友。イースター等の前の40日間の断食について。これによってキリスト者がいかに痛ましい負担を強いられているかについて」(Der ander bundtsgnosz. Vom fasten der .xl. tag vor Osteren vnd andern, wie do mit so jämerlich wirt beschwärt das Christenlich volck.⁴⁾) というタイトルの小冊子である。このうち、16頁1行目から17頁22行目までの総語数539語の部分を分析対象とした。これは、Eberlin von Günzburg が断食に抗議した小冊子である。この宗教的な小冊子は1521年に流布した。

3.3. ミクロレベルでの分析

では、ここから実際の分析を少し紹介していくことにする。「マルティン・ルター氏の真の肖像画」の一節を例にして、ミクロレベルの分析の仕方を示すと、次のようになる(この示し方は、Ágel/Hennig の示し方に一部修正を施して、わかりやすく示し直したものである)。

(本文) O Gott / hörest du nicht

(分析) → Emotionsausdruck → Temporaldeixis → Personendeixis

(本文) mein Gott / bist du Todt?

(分析) → Anredenominativ → Temporald. → Personend.

(本文) Nein / du kanst nicht sterben /

(分析) → Frage-Antwort-Sequenz → Personend. → Temporald.

(本文) du verbirgst dich allein.

(分析) → Personend. → Temporald. → Personend.

16) 本論文で分析対象とする報道的な印刷ビラは、ひとりの一般男性によって生じた殺人事件を報じており、森澤(2010)の**ことば**を借用するならば、「市井の犯罪」(森澤 2010: 71)が描かれた印刷ビラである。

(本文) hast du mich darzú erwölet

(分析) → Temporalde. (erwölet を含む) → Personend. → Personend.

(本文) /das ich die warheit fördern sol /

(分析) → Personend.

例えば1行目、最初にある *O Gott* は「情緒の表出」という近いことばの要素として見なされ、1ポイントとしてカウントされる。つまり、「おお、神よ」という表現は、感情的であり近いことば的であるということになる。次の *hörest* は「時制の直示性(Temporaldeixis)」という近いことばの要素、¹⁷⁾ 続く *du* は「人称の直示性(Personendeixis)」という、それぞれ近いことばの要素として1ポイントずつ同様にカウントされる。「マルティン・ルター氏の真の肖像画」に含まれる近いことばの要素の合計(N)は144あり、全体の単語数(W)が451なので、その割合(N/W)は、およそ0.32である。これは、該当の文章中で用いられる1単語に対する近いことばの要素の割合である。

$$144(N) \div 451(W) = 0.319\dots$$

$$= 0.32$$

分析対象の近いことばの要素の割合を算出したあとは、規準テキストとの比較をする必要がある。Ágel/Hennig は、分析対象のテキストから算出された話しことば性の値を、座標軸上に相対的に位置づけるために、座標軸の一番左に置くべきテキスト、つまり規準テキストを想定しておくことが必要だと考えている。そこでマイクロレベルでの規準テキストとして選ばれたのは、話しことば性が極めて高いと想定される特定の現代ドイツ語の音声談話である。これは、Daniel という若者が話す Radio-phone-in の音声談話を文字化したものである (Ágel/Hennig 2006: 36

17) 分析例の最後に示してある *fördern sol* が Temporaldeixis としてカウントされていないのは、Ágel/Hennig の Temporaldeixis の定義において、「従属文の場合は、時間関係は上位の文に依存するため、直示的ではない」と解説されているからである (Ágel/Hennig 2006: 58 を参照)。

を参照)。この規準テキストが、座標軸上において一番左のポール(Nähepol)に設定されるということは、このテキストには近いことば性が100%あると(便宜的に)設定されることを意味する。Ágel/Hennig自身の算出の結果、この規準テキストには1単語に対する近いことばの要素の割合が0.63であったことがわかっている。そこで、この0.63という値が100%の近いことば性であるとされるのであれば、ルターに関する印刷ビラは一体何%の近いことば性があるだろうか。その値を求めるために、今度は以下のような計算式が成立する。

$$0.63 \text{ (規準テキスト)} : 100 \text{ (%近いことば性があると設定)} = 0.32 : X \text{ (%)}$$

$$X = 50.793\dots$$

$$X = 50.79\%$$

つまり、50.79%という値が算出される。これは、Ágel/Hennigが定めた談話テキストに100%近いことば性があるとしたときに、ルターに関する印刷ビラは50.79%近いことば性があることを示す結果となる。

以上のような計算方法に基づいて、残り二つのテキストについても分析を行った。まず報道的なアダムの子殺しビラでは、近いことばの要素の合計(N)は188あり、テキストの総単語数(W)は777あった。そこで以下の計算式が成り立つ。

$$188 \div 777 = 0.241\dots$$

$$= 0.24$$

$$0.63 : 100 = 0.24 : X$$

$$X = 38.095\dots$$

$$X = 38.10\%$$

つまり、アダムの子殺しのビラは、38.10%の近いことば性があった。そしてGünzburgの宗教的な小冊子では近いことばの要素の合計(N)が82あり、テキストの単語数(W)は539あった。

$$82 \div 539 = 0.152\dots$$

$$= 0.15$$

$$0.63 : 100 = 0.15 : X$$

$$X = 23.809\dots$$

$$X = 23.80\%$$

この結果、Günzburg の小冊子には 32.80% の近いことば性があったことがわかる。以上のように得られた結果を簡単に表で示しておく。

テキスト	マイクロレベルでの近いことば性
ルターに関する印刷ピラ	50.79%
アダムの子殺しに関する印刷ピラ	38.10%
Günzburg の小冊子	23.80%

3.4. マクロレベルでの分析

では次に、ルターに関するピラの冒頭部を実際に分析しながら、マクロレベルではどのようにして近いことば性の高さを算出するのかを例示しよう。

(本文) O Gott / hörest du nicht mein Gott /

(分析) → NNS (Nähe-Nicht-Satz) → Elementar-Satz 1 → NNS

(本文) bist du Todt? Nein / du kanst nicht sterben /

(分析) → Elementar-Satz 1 → NNS → Elementar-Satz 1

(本文) du verbirgst dich allein. hast du mich darzü erwölet /

(分析) → Elementar-Satz 1 → Elementar-Satz 1

(本文) das ich die warheit fördern sol /

(分析) → Elementar-Satz x

まずは *O Gott* から見てみる。マクロレベルの分析では、NNS (Nähe-Nicht-Satz) に分類される。直訳すれば「文ではない近い」要素となるが、これは形式的には文ではない要素（文相当表現）のことである。この要素に対して、近いことば性の高さが認定される。したがって、例に示したテキストの先を見ていくと、*mein Gott* のような呼びかけや、*Nein* といった応答詞も近いことばの要素とみなされ、NNS として分類される。その他にも NNS には、呼びかけの主格 (Anredenominativ) や自由テーマ、付け足しなどが含まれる。¹⁸⁾ 続く *hörest du nicht* はどうだろうか。これは Elementar-Satz 1 に分類される。まず Elementar-Satz とは、主語と述語が一組含まれているような基礎文を意味している。そのうち、第一レベル (erster Grad) の Elementar-Satz、つまり副文でない Elementar-Satz は、Elementar-Satz 1 に分類される。一方、例文の最後の行は副文であるため、Elementar-Satz x に分類される。¹⁹⁾

このようにして、マクロレベルにおいて近いことば性が高いと分類される要素がいくつあるのかを数え上げていく。ルターに関する印刷ビラでは、次のような総数が得られた。

Wortform	Nähe-Nicht-Satz	E-Satz ²⁰⁾	E-Satz 1	E-Satz x
451	25	59	44	15

18) 自由テーマ、付け足しに関しては、前述の 3.1 を参照のこと。

19) 基礎文の中でも第二レベル以上 (2, 3, 4, ...x) のものが該当するため、副文である基礎文が Elementar-Satz x と表記される。

20) 以下、表の中では Elementar-Satz を E-Satz と表記する。この Elementar-Satz は Elementar-Satz 1 と Elementar-Satz x の合計を示している。

この結果を、以下の4つ a) – d) の計算式に則り、値を算出する。

a) Nähe-Nicht-Satz (NNS)/ E-Satz	b) E-Satz 1/E-Satz x	c) E-Satz/I-UBS	d) Wortform durch Satz x + Nähe-Nicht-Satz + Distanz-Nicht-Satz ²¹⁾
近いことば性の要素を持つ、文相当表現/基礎文の割合	基礎文 1/基礎文 x	基礎文/別の基礎文によって中断されている文	基礎文が何語で構成されているか
0.423...	2.933...	-	6.094...

a) の計算式では、Nähe-Nicht-Satz (NNS) と基礎文の割合を算出する。ここでは近いことば性の高い文相当表現（呼びかけや応答詞）が、文の総数に対して多ければ多いほど、近いことば性が高いことになる。b) では基礎文 1（副文ではない基礎文）と基礎文 x（副文である基礎文）が使用されている割合を測定する。副文ではない基礎文（基礎文 1）が相対的に多い程、近いことば性が高いことになる。c) に関しては、ルターに関する印刷ビラでは観察されなかった要素を含む計算式であるため、分析対象には反映されない。ただしこの c) についてここで説明をしておく。I-UBS とは、integrativ unterbrochener Satz のことで、統合的に「別の E-Satz によって中断された E-Satz」（Ágel/Hennig 2006: 64）と定義されている。つまり、いわゆる箱入り文がいくつあるかを測定することになる。箱入り文が少ない程、近いことば性は高くなることを示している。d) では基礎文が何語で構成されているのかを分析する。基礎文を構成する語数が少ない程、近いことば性が高いことになる。

この4つの計算式で得られた値から、マクロレベルでの近いことば性の高さをパーセントに換算する。マクロレベルにおいても、ミクロレベル同様に規準テキストが必要となる。ただし、マクロレベルでの分析は、近いことば性のみに関わるミクロレベルとは異なり、近いことば性と遠いことば性（話ことば性と書きことば性）の両方に関わる。Ágel/Hennig は、規準テキストとして近いことば性の

21) この要素もルターに関する印刷ビラには該当する物がなかった。Distanz-Nicht-Satz とは、遠いことば性（書きことば性）が高い文相当表現のことで、例えば見出し語や表題などがそれに分類される（Ágel/Hennig 2006: 64 を参照）。

ロトタイプを設定するだけでは不十分であり、遠いことば性のプロトタイプも規
準テキストとして必要であると考えている。つまり、「マクロレベルの近いことば
性という領域においては、比較の基礎となるテキストがふたつ必要である」
(Ágel/Hennig 2006: 34)。一つはマイクロレベルにおいて使用した同じ音声談話を座
標軸の左端 (Nähepol) に設定し、もう一つは、イマヌエル・カントの『プロレゴメ
ナ』を座標軸の右端 (Distanzpol) に設定する (Ágel/Hennig 2006: 65 を参照)。
つまり、『プロレゴメナ』は遠いことば性が 100% (近いことば性が 0%) である
と設定されることになる。この二つの規準テキストの 4 つの値は、Ágel/Hennig
によって算出されており、以下の表の通りである。²²⁾

Texte	a)NNS/ E-Satz	b)E-Satz 1/ E-Satz x	c)E-Satz/ I-UBS	d)Durchschnittliche Satz+Nicht-Satz-Länge
音声談話 (Nähepol)	0.704	4.07	114.0	4.55
『プロレゴメナ』 (Distanzpol)	0.041	0.75	8.1	8.74

この表で示されている音声談話のそれぞれの値を近いことば性が 100%あると
設定し、反対に『プロレゴメナ』の 4 つの値はそれぞれ近いことば性が 0%と設
定する。そして a), b), c), d) 各々の 4 つのカテゴリごとに座標軸が作られ、ル
ターの印刷ピラで得られた値が何%近いことば性があるのかを算出する。例えば
a)を例に解説してみると、Nähepol の値は表にある通り 0.704 となり、Distanzpol
の値は 0.041 となる。これを座標軸で示すと次のようになることがわかる。



22) Ágel/Hennig(2006: 68)の表を参照し、一部変更した。

この図から座標軸全体の長さは 0.663 あることがわかる。²³⁾ ルターに関する印刷ピラの a) の値は 0.423 であるから、Nähepol からは 0.281 離れていることになる。²⁴⁾ このことから、次の計算式が導かれる。

$$0.281 \div 0.663 \times 100 = 42.383\dots$$

つまり、ルターに関する印刷ピラは、Nähepol から 42.38%相当分離れていることになる。この結果から、ルターに関する印刷ピラは 57.62%近いことば性があることがわかった。同様にして、残りの b), c), d) も値を算出する。すると、以下のような結果が得られた。

分析対象	a)	b)	c)	d)
ルターに関する印刷ピラ	57.62%	65.67%	-	63.15%

これらの値を平均し、マクロレベルでの近いことば性の値とする。結果、ルターに関する印刷ピラは、マクロレベルでは 62.15%近いことば性があったことがわかった。

同様にしてもう二つの分析対象を分析する。アダムの子殺しの印刷ピラでは以下のような数値が得られた。

a) Nähe-Nicht-Satz (NNS) ²⁵⁾ / E-Satz	b) E-Satz l/E-Satz x	c) E-Satz/I-UBS	d) Wortform durch Satz + Nähe-Nicht-Satz + Distanz-Nicht-Satz
0.166...	1.833...	-	6.475...

23) $0.704 (\text{Nähepol}) - 0.041 (\text{Distanzpol}) = 0.663$

24) $0.704 (\text{Nähepol}) - 0.440 (\text{ルターに関する印刷ピラ}) = 0.281$

25) アダムの子殺しピラでは、直接話法がテキスト内に使用されていたため、Adam や Son といった呼びかけの主格が用いられている。これらを、NNS としてカウントした。

分析対象	a)	b)	c)	d)
アダムの子殺しビラ	19.01%	32.54%	-	54.05%

この a), b), d) で得られた数値を平均すると、アダムの子殺しビラは、マイクロレベルにおいて 35.20%の近いことば性があったことがわかる。

続いて同様に Günzburg の小冊子についても近いことば性の高さを算出する。Günzburg の小冊子からは以下のような数値が得られた。

a) Nähe-Nicht-Satz (NNS) E-Satz	b) E-Satz 1/E-Satz x	c) E-Satz/I-UBS ²⁶⁾	d) Wortform durch Satz + Nähe-Nicht-Satz + Distanz-Nicht-Satz
0.088...	0.942...	34	7.591...

分析対象	a)	b)	c)	d)
Günzburg の小冊子	7.12%	5.81%	24.26%	27.45%

この a) から d) の結果を平均すると、Günzburg の小冊子は、マクロレベルでは 16.21%の近いことば性があった。以下に表で3つの値を示す。

分析対象	マイクロレベルの近いことば性の高さ
ルターに関する印刷ビラ	62.15%
アダムの子殺しに関する印刷ビラ	35.20%
Günzburg の小冊子	16.21%

3.5. 近いことば性の最終値

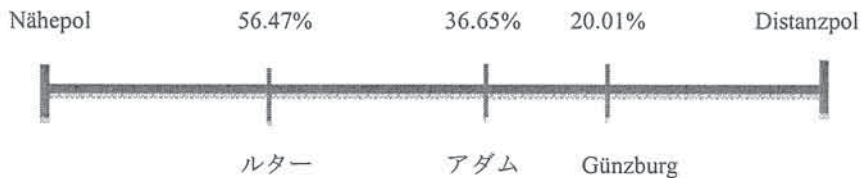
Ágel/Hennig はマイクロレベルとマクロレベルの値を平均化した値が、最終的なテキストの近いことば性だと定めている。そこで以下の表で3つの分析対象のミク

26) Günzburg の小冊子では I-UBS、つまり箱入り文が 2 件確認された。例えば [...] *das alle christenheit welche läben wollen in ghorsam Römich bischoffa iärlich gezwungen werden [...]* とあり、*welche läben wollen* という基礎文により、*das alle [...]* *gezwungen werden* の基礎文が中断されている。

ロレベルとマクロレベル、そして二つの平均値を示す。

分析対象	マイクロレベル	マクロレベル	平均値
ルターに関する印刷ビラ	50.79%	62.15%	56.47%
アダムの子殺しの印刷ビラ	38.10%	35.2%	36.65%
Günzburg の小冊子	23.80%	16.21%	20.01%

この平均値を踏まえて、それぞれの値を座標軸上に位置づけ、相対的に比較する。



座標軸上に位置づけることで、3つのテキストの近いことば性の値の差異が、はっきりと目に見えてくる。ルターに関する印刷ビラは、残りの二つのテキストと比べると、かなり近いことば性が高いことがわかる。さらに、アダムの子殺しの報道の内容の印刷ビラは、ルターに関する宗教的内容の印刷ビラと比べると、近いことば性は低い。つまり、同じ印刷ビラという一枚刷りの紙媒体でも、扱う内容や伝達する情報が異なると、話しことば性の高さに差異が生じることがわかる。また、宗教的な印刷ビラと小冊子に目を向けると、こちら二つは同じ宗教的な内容の伝達という目的であるにもかかわらず、ビラか小冊子かという形態上の違いに応じて、その近いことば性には大きな差が生じている。

4. 16世紀のドイツ語を分析するに際しての測定法修正

4.1. 言語規範化の途上にある16世紀

以上のように、Ágel/Hennig (2006)のモデルを適用して、16世紀の印刷ビラと小冊子の話しことば性の値を測定することを試みてきた。しかしながら、このモデルは本来、1650年から2000年までの新高ドイツ語期のドイツ語を分析対象とするように構想されている。つまり、新高ドイツ語の文法規範がほぼ確定した17

世紀後半以降のドイツ語について、その規範から逸脱するような言語現象に「近いことば性」という特徴づけを認定しているわけである。しかし、まだ言語の規範化・統一化への途上にあった 16 世紀においては、全般に一つの規範というものが存在しておらず、さまざまな異形 (Variante) が存在していた。すなわち、この初期新高ドイツ語期においては、近いことば性を明示しているとは言えないような現象が、新高ドイツ語期の言語規範を前提とする Ágel/Hennig (2006) の測定法では話しことばの要素としてみなされている可能性がある。Ágel/Hennig の測定法をそのまま 16 世紀のドイツ語に適用したのでは、適切に近いことば性を測定することができない可能性がある。

そこで以下に、16 世紀という時代の言語的状況を考慮した上で、3 つのテキストの話しことば性を再度測定し直してみたい。

4.2. 話しことば性を認定しない言語現象

4.2.1 語末音消失

Ágel/Hennig (2006) は、語末音消失 (Apokope) の現象を、近いことばの要素とみなし、マイクロレベルにおいて 1 ポイントとしてカウントしている。語末音消失とは、例えば現在の規範において *ich habe* となるところが、*ich hab*²⁷⁾ のように語末音 *e* が消失した形のことを指す。しかし、この語末音 *e* が消失する現象は、17 世紀前半に書かれたさまざまなテキストの中でも頻繁に生じていたことがわかっている (Takada 1998: 213 を参照)。したがって、語末音消失の現象は、16 世紀のテキストでは近いことばの要素として数え上げない方がより適切であると考えられる。

4.2.2 多成分の動詞句

例えば、*„Die Bauren verwundern sich, daß wihr mit dem Leben sindt darvonkomen.*“ (Ágel/Hennig 2006: 395) のように、副文中の多成分の動詞句の順序が現代ドイツ語の規範から逸脱している場合、Ágel/Hennig (2006) はマイクロレベルにおいて近いことばの要素 (Serialisierung における近いことば性) とみなしている。16 世紀のテキストを実際に例として見てみると、アダムの子殺しの印刷ビラに、*„Da es aber*

27) この *ich hab* の使用は、3 つの分析対象全てに見られた。

ihm nicht hat mögen empfehlen [...]”とある。これは現在の規範であれば *hat empfehlen mögen* となることから、近いことばの要素としてカウントできることになる。しかし現代語とは異なり、17世紀前半においてはこのような多成分の動詞句の様々な配列が書きことばにおいて例証されている (Takada 1998: 233-261 を参照) ことを考慮すると、この多成分の動詞句の語順は、16世紀のテキストに関しては、近いことばの要素とみなさい方がよいと考えられる。

4.2.3 枠外配置

さらにもう一つ、枠外配置の現象もあげられる。現在の規範であれば、枠構造内に収まるはずの要素が、枠の外に出されるような現象は、Ágel/Hennig (2006) において近いことばの要素としてマイクロレベルでカウントされている。例えば Günzburg の小冊子では、*„do mit vnyffhörlich vnriw bleibt in christlichen härtzen“* のような枠外配置が見られた。しかし、「副文の際に (中略) 初期新高ドイツ語においては、強勢のない代名詞を除いて、名詞句 (主語、目的語、時の2格や3格など)、副詞、前置詞句が枠外配置され」(Ebert/Reichmann/Solms/Wegera 1993: 435) ていたことがわかっている。つまりこの枠外配置の現象も、16世紀のテキストを分析する上では、近いことばの要素としては数えない方がよいであろう。

4.3. 分析結果比較

以上にあげた3つの言語現象は、²⁸⁾全てマイクロレベルでの近いことば性の値のみに関連する。このマイクロレベルでの結果比較を、次表に示す。

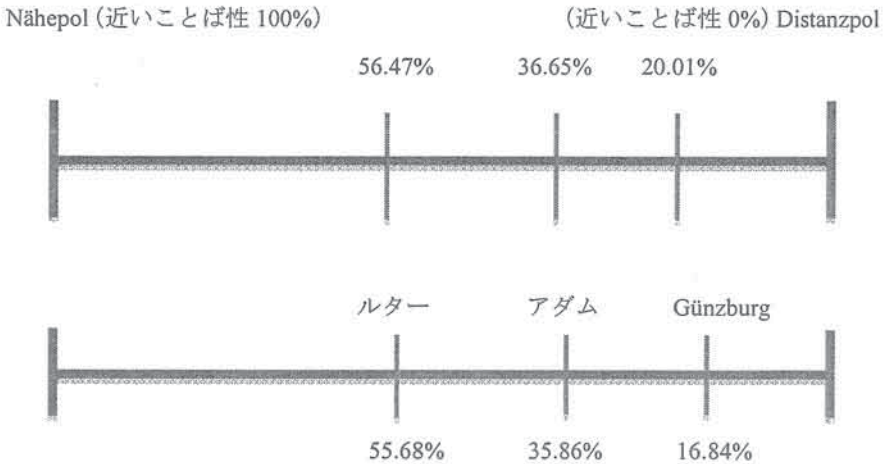
分析対象 (マイクロレベル)	Ágel/Hennig の測定法に基づいた結果	16世紀のドイツ語を考慮した結果
ルターに関する印刷ビラ	50.79%	49.21%
アダムの子殺し印刷ビラ	38.10%	36.51%
Günzburg の小冊子	23.80%	17.46%

28) ここに挙げた「語末音消失」、「多成分の動詞句」そして「枠外配置」の現象以外にも、さらに多様な言語の現象が、16世紀の話しことば性と書きことば性に関与していただろう。この点のさらなる論究は、筆者の今後の課題である。

16 世紀の言語現象を考慮して測定し直すと、特に Günzburg の小冊子の値が大きく低下したことがわかる。最終的にマイクロレベルとマクロレベルの値を平均化し、テキストの近いことば性の値を算出する。表にまとめると以下のようになる。

分析対象 (マイクロとマクロ平均値)	Ágel/Hennig の測定法に基づいた結果	16 世紀のドイツ語を考慮した結果
ルターに関する印刷ビラ	56.47%	55.68%
アダムの子殺し印刷ビラ	36.65%	35.86%
Günzburg の小冊子	20.01%	16.84%

この結果を踏まえて、座標軸上に位置づけを行う。上段の座標軸は Ágel/Hennig の測定に従った値を示し、下段の座標軸は 16 世紀のドイツ語を考慮して測定し直した値を示している。



16 世紀の言語現象を考慮して得られた値は、Ágel/Hennig の測定法によって算出された値と比較すると、確かに 3 つの分析対象全ての近いことば性がわずかに低くなったことがわかった。特に Günzburg の小冊子の値に関しては、残り二つの分析対象の結果と比べると、その差は開いた。

4.4. 「遠いことば」の要素

16 世紀のテキストを分析していく中で、Ágel/Hennig モデルには組み込まれてはいないものの、16 世紀の言語現象という観点を踏まえると重要だと考えられる要素が見えてきた。それを仮に、ここでは「遠いことばの要素」としておく。その遠いことばの要素として、定動詞欠如の構文 (afinite Konstruktion) が挙げられる。これは定動詞後置の際に、完了の助動詞 *sein/haben* の定動詞が省略されるような構造のことを指している (Ebert/Reichmann/Solms/Wegera 1993: 440 を参照)。この言語現象も実際に例を示すと、アダムの子殺しに関する印刷ビラにおいて „*Wie er nun bei den Kindern allein gewesen / hat er [...]*“ という文が見られた。この文では、„*gewesen*“ の後に本来あるはずの定動詞 *ist* が省略されている。このような定動詞欠如の構文という現象は、16 世紀前期に官庁語のなかで広まり、17 世紀になっても、多くの官庁テキストにおいて使用されていたことがわかっている (Ebert/Reichmann/Solms/Wegera 1993: 442 を参照)。つまり、遠いことば (書きことば) 性の強い言語現象とすることができる。

Ágel/Hennig のモデルでは、マクロレベルにおいて、別の基礎文によって中断された基礎文、つまり箱入り文がテキスト内でどの程度出現するのかを測定する計算式がある。²⁹⁾ この計算式に、箱入り文のみならず、定動詞欠如の構文のような要素も反映させることができれば、16 世紀の近いことば性を算出する際には、より正確な値を得ることができるだろう。

5. おわりに

以上の分析から、本論文で考察対象とした 3 つの文字テキストのうち、宗教的な印刷ビラにおいて最も高い話しことば性の値を得ることができた。その次に、報道的な内容の印刷ビラの話しことば性が高く、宗教的な小冊子の話しことば性が最も低くなる結果となった。16 世紀における印刷ビラ・小冊子の中の話しことば性の程度には、テキストの種類とテキスト作成の意図の違いによって比較的大きな差があることが判明した。従って、この時代の印刷ビラ・小冊子に一概に、話しことば性が高かったという言い方をするのは正当ではないことがわかった。

ただし、今回の 3 つのテキストのみに基づく結果をもって、16 世紀の宗教的な

29) この点に関しては、Ágel/Hennig (2006: 64) 及び、本論文 3.4 を参照。

印刷ビラ、小冊子そして報道的な印刷ビラの全般的な傾向性を論じることはできないであろう。対話形式を用いた小冊子を分析対象とするならば、その話しことば性は高くなると見込まれる。³⁰⁾ また、例えばアダムの子殺しに関する報道的なビラには直接話法の使用が多く含まれているが、報道的な印刷ビラ³¹⁾ がどれも同様に直接話法を使用しているとは断定できない。³²⁾ このような観点からテキストの種類そして作成意図をさらに正確に把握した上で、より精緻な研究を行うことを筆者の今後の課題としたい。

使用テキスト

Ware Contrafactur Herrn Martin Luthers (um 1550?)

出典：Harms, Wolfgang/Schilling, Michael (Hg.) (1997): *Die Wickiana. Die Sammlung der Zentralbibliothek Zürich, kommentierte Ausgabe, Teil I/II* (Deutsche illustrierte Flugblätter des 16. Jahrhunderts, Bd. 6/7), Tübingen, 107.

Die Mordtat des Adam Stegmann zu Obernehen in Elsaß (1556)

出典：田辺幹之助・佐藤直樹（編）（1995）『ゴータ市美術館所蔵作品による宗教改革時代のドイツ木版画』国立西洋美術館、41 頁。

Der ander bundtsgnosz. Vom fasten der .xl. tag vor Osteren vnd andern, wie do mit so jämerlich wirt beschwärt das Christenlich volck. (1521)

出典：Enders, Ludwig (Hg.) (1869): *Ausgewählte Schriften. Johann Eberlin von Günzburg*. Bd. 1. Halle a.S. (Flugschriften aus der Reformationszeit XI), 16-17.

30) 新田 (2010) は、宗教改革期に流布した実際の小冊子のテキスト分析対象とし、問答書、論争書など数種例として取り上げ、細部に及ぶ考察を行っている (新田 2010: 78-85 を参照)。

31) 小野 (2006b) は、報道的な印刷ビラのみならず、「新聞の萌芽となる週間新聞も 17 世紀初頭にこの Flugschrift から発達してくる」(小野 2006b: 172) と指摘している。つまり印刷ビラと小冊子双方の紙媒体の形状において、報道的な内容が扱われていたと考えることができる。

32) 17 世紀末において新聞学史上初めて、*Zeitung*' の概念について論究したとされる Stielor (1695) によれば、報道内容の真実性を主張する際には、書き手は「様々なことを自身の目で見て、耳で聞いて、手で触れた」(Stielor 1695 [1969] : 57) という記述と共に、扱う出来事に関する「場所、日時もしくは日付」(Stielor 1695 [1969] : 57) を示すことが重要な役割を担っている。また新聞の読者は、「自らが知りたいと思うことに関して情報を得る目的で新聞」(Stielor 1695 [1969] : 27) を読むため、新聞においては書き手による判断が下されることなく、客観性が重視されねばならないという。

参考文献

- Ágel, Vilmos/Hennig, Mathilde (Hg.) (2006): *Grammatik aus Nähe und Distanz: Theorie und Praxis am Beispiel von Nähertexten 1650-2000*. Tübingen.
- Ágel, Vilmos/Hennig, Mathilde (Hg.) (2007): *Zugänge zur Grammatik der gesprochenen Sprache*. Tübingen.
- Ebert, Robert Peter/Reichmann, Oskar/Solms, Hans-Joachim/Wegera, Klaus-Peter (1993): *Frühneuhochdeutsche Grammatik*. Tübingen.
- エンゲルジング、ロルフ (1985) (中川勇治訳)『文盲と読書の社会史』思索社。
- 川島淳夫編集主幹 (1994)『ドイツ言語学辞典』紀伊国屋書店。
- Koch, Peter/Wulf Oesterreicher (1985): Sprache der Nähe — Sprache der Distanz. Mündlichkeit und Schriftlichkeit im Spannungsfeld von Sprachtheorie und Sprachgeschichte. In: *Romanistisches Jahrbuch*, 36, 15-43.
- Koch, Peter/Wulf Oesterreicher (1994): Schriftlichkeit und Sprache. In: Hartmut, Günther/Otto, Ludwig (Hg.) (1994): *Schrift und Schriftlichkeit: Ein interdisziplinäres Handbuch internationaler Forschung*. 1. Handband. Berlin, 587-604.
- Meuche, Hermann (1976): *Flugblätter der Reformation und des Bauernkrieges: 50 Blätter aus der Sammlung des Schloßmuseums Gotha*. Leipzig.
- 森澤万里子 (2010)「トルコ情勢を報じる 16 世紀のパムフレットーテキスト作成に関与した社会的意図をめぐる一考察」〔日本独文学会『ドイツ文学』第 140 号、60-75〕。
- 新田春夫 (2010)「ドイツ宗教改革期における民衆教化文書—その言語的・文書的特徴—」〔日本独文学会『ドイツ文学』第 140 号、76-91〕。
- 小野光代 (2006a)「16 世紀ドイツの Flugschrift における語・句の重ねについて — 言語平衡論との関連において —」〔関西外国語大学『研究論集』第 83 号、143-157〕。
- 小野光代 (2006b)「ドイツ語史研究における Flugschrift 資料の意義 — 農民戦争期の Flugschrift を中心に —」〔吉村耕治 (編)『言語文化と言語教育の精髓 — 堀井令以知教授傘寿記念論集』大阪教育図書、169-189〕。
- Schilling, Michael (1990): *Bildpublizistik der frühen Neuzeit; Aufgaben und Leistungen des illustrierten Flugblatts in Deutschland bis um 1700*. Tübingen.

- Schön, Erich (1987): *Der Verlust der Sinnlichkeit oder die Verwandlungen des Lesers: Mentalitätswandel um 1800*. Stuttgart.
- Schwitalla, Johannes (1983): *Deutsche Flugschriften 1460-1525: Textsortengeschichtliche Studien*. Tübingen.
- Schwitalla, Johannes (1999): *Flugschrift*. Tübingen.
- Schwitalla, Johannes (2000): Medienwandel und Reoralisierung. Phasen Sprechsprachlicher Nähe und Ferne in der deutschen Sprachgeschichte. In: Dorothea Klein (Hg.): *Vom Mittelalter zur Neuzeit. Festschrift für Horst Brunner*. Heidelberg, 669-687.
- Scribner, Robert W. (1981): Flugblatt und Analphabetentum. In: Hans-Joachim Köhler (Hg.): *Flugschriften als Massenmedium der Reformationszeit*. Stuttgart.
- 芹澤円 (2011) 「宗教改革期の印刷ビラにみる説得的効果 — 民衆の心をつかむレトリック」『学習院大学ドイツ文学会研究論集』第 15 号、1-30.]
- Stieler, Kaspar (1969 [1695]): *Zeitungs Lust und Nutz*. Vollständiger Neudruck der Originalausgabe von 1695. Herausgegeben von Gert Hagelweide. Bremen.
- Takada, Hiroyuki (1998): *Grammatik und Sprachwirklichkeit von 1640-1700: Zur Rolle deutscher Grammatiker im schriftsprachlichen Ausgleichsprozess*. Tübingen.
- 高田博行 (2007) 「歴史語用論の可能性 — 甦るかつての言語的的日常」、『月刊 言語』12月号、68-75.]
- 高田博行・椎名美智・小野寺典子 (編) (2011) 『歴史語用論入門 過去のコミュニケーションを復元する』大修館書店.
- 渡辺学 (2009) 「話しことばの特性をどのように測定したらよいのか?」、高田博行 (編) 『話しことば研究をめぐる 4 つの問い』〔日本独文学会『日本独文学会研究叢書』第 065 号、1-21.]

(せりざわ・まどか 学習院大学大学院人文科学研究科博士前期課程)

Zur Mündlichkeit von Flugblättern und Flugschriften im 16. Jahrhundert

MADOKA SERIZAWA

Koch/Oesterreicher haben 1985 zum ersten Mal darauf hingewiesen, dass zwischen „medialer“ und „konzeptioneller“ Mündlichkeit und Schriftlichkeit zu unterscheiden ist. Die beiden Forscher haben ein Modell entwickelt, mit dem man den Grad der Mündlichkeit in verschiedenen Äußerungsformen miteinander vergleichen kann, indem sie an einer Koordinatenachse den Text eines phonischen und graphischen Mediums platziert haben. Damit wurde das Verständnis widerlegt, dass einerseits die gesprochene Sprache einfach mündlich sei und andererseits die geschriebene Sprache schriftlich. In ihrem Modell verwenden Koch/Oesterreicher weiter die Ausdrücke ‚Sprache der Nähe‘ und ‚Sprache der Distanz‘. Wenn ein Sprecher mental in naher Beziehung zu einem Hörer steht, wird seine Sprache konzeptionell mündlicher, weshalb Koch/Oesterreicher die ‚Sprache der Nähe‘ für mündlich halten, während die Sprache konzeptionell schriftlicher wird, wenn ein Sprecher mental einem Hörer ferner steht; daher wird die schriftliche Sprache mit der ‚Sprache der Distanz‘ gleichgesetzt. Auf diesem Modell aufbauend, haben Ágel/Hennig (2006) ein entwickeltes Modell für eine Sprachlichkeit der Nähe vorgeschlagen. Sie haben versucht, in Texten einen bestimmten Wert dieser Sprachlichkeit der Nähe zu errechnen, indem sie, wie Koch/Oesterreicher, den Wert an einer Koordinatenachse positioniert und so die Nähesprachlichkeit verschiedener Äußerungen miteinander verglichen haben.

Zur Analyse der Mündlichkeit von Flugblättern und Flugschriften im 16. Jahrhundert wird in der vorliegenden Arbeit das Modell von Ágel/Hennig (2006) angewandt. In der Forschung wird immer wieder auf die hohe Mündlichkeit hingewiesen, die in den Flugblättern und Flugschriften zu finden sei, denn beide Texte seien von der Art der gesprochenen Sprache; so sind beispielsweise nach Meuche (1976) die Texte der Flugblät-

ter kurz und konkret; auch sind nach Schwitalla (1999) in Texten der Flugschriften häufig Anrufe und Anrede zu finden. In diesem Aufsatz soll untersucht werden, ob die Texte der Flugblätter und Flugschriften eine hohe Mündlichkeit hatte und in welcher Weise diese Textsorte bzw. ihre Intention durch Mündlichkeit beeinflusst wurde.

Zunächst soll das Modell der Nähesprachlichkeit von Ágel/Hennig (2006) genauer beschrieben werden. Sie messen den Wert der Sprachlichkeit der Nähe auf der Mikro- und Makroebene. Auf der Mikroebene zählt man einzelne, in einem Text vorkommende Elemente der Nähesprachlichkeit auf. Beispielweise werden *O Gott* als Emotionsausdruck und *du* als Temporaldeixis betrachtet, weshalb diese Ausdrücke einen höheren Wert der Nähesprachlichkeit anzeigen. Schließlich dividiert man diese Elemente durch die Anzahl der Wörter des Textes und rechnet das Ergebnis in Prozentzahlen um. Je höher dieser Wert ist, desto höher ist auch die Nähesprachlichkeit in dem betreffenden Text. Danach kläre ich die Makroebene. Wichtig ist auf dieser Ebene der Unterschied zwischen dem Elementar-Satz, der das Paar Subjekt und Verb enthält, und dem Nicht-Satz. Somit wird hier eine genauere Differenzierung geleistet. Der Durchschnitt der Werte der Mikro- und Makroebene benennt schließlich die Nähesprachlichkeit eines Texts. Mit Hilfe dieses Modells werden in diesem Aufsatz die drei genannten Objekte analysiert, so dass das religiöse Flugblatt 56.74%, das Berichtsflugblatt 36.65% und die religiöse Flugschrift 20.00% Nähesprachlichkeit ergaben.

Dabei ist allerdings zu beachten, dass es hierbei um Texte aus dem 16. Jahrhundert geht. Damals gab es keine verbindlichen Sprachnormen, sondern es existierten unterschiedliche Sprachvarianten. So könnten z.B. im 16. Jahrhundert als nicht besonders mündlich angesehene sprachliche Phänomene möglicherweise in dem Model von Ágel/Hennig als nähesprachliche Elemente betrachtet werden. Als ein sprachliches Phänomen im 16. Jahrhundert wird die Apokope genannt. In der Messmethode von Ágel/Hennig wird die Apokope als ein auf der Mikroebene auftauchendes nähesprachliches Element angesehen. Die Apokope war aber bis zur ersten Hälfte des 17. Jahrhunderts ein durchaus übliches, in allen Texten häufig auftretendes Phänomen. Aus diesem Grund soll die im 16. Jahrhundert verbreitete Apokope im Text nicht als nähesprachliches Element angesehen werden. Ebenfalls schließe ich einige andere Elemente aus. Eine

erneute Messung führte zu dem Ergebnis, dass der Nähesprachlichkeits-Wert für das religiöse Flugblatt 55.68%, für das Berichtsflugblatt 35.68% und für die religiöse Flugschrift 16.84% betrug.

Diese zweite Messung bestätigt den höchsten Grad von Mündlichkeit in dem religiösen Flugblatt, das für ein breiteres Publikum geschrieben wurde. Dies kann in Hinsicht auf diese Textsorte auf eine Abhängigkeit von Mündlichkeit hinweisen. Das Ergebnis der Rangordnung wird aber nicht immer vollständig bestätigt, weshalb weitere Daten erhoben werden sollen.